

ヒポクラテスの「誓い」を読む(3)

—「誓い」の共同体—

川田 殖

本稿では、西洋古代世界に見られる医療共同体のいくつかを対比させながら、ヒポクラテスの「誓い」が採用された共同体がいかなるものを想定し、そこに見られるいくつかの特徴を考察した。特にそこに見られるいわゆる「家長的的性格」について、それ自体の分析を行うとともに、わが国における類似の形態についても言及し、将来の進路を考えるための一助とした。

キーワード：誓い、ヒポクラテス、共同体

1

数年前、ギリシアや地中海沿岸を旅しながら、新しく気付き感じ入った事柄が幾つかあった。その中の一つにエピダウロスとコス島の神域の共通性ということがある。前者はアカイアとペロポネソス半島を結ぶ地峡部近くに位し、典型的な野外劇場を持つ芸術の場として、また後者はエーゲ海東南部に浮かぶ島であり、医聖ヒポクラテスの生地また教育活動の地として、ともに昔からよくその名を知られてきた。しかし行ってみると前者には野外劇場の傍らにアスクレピオスの神殿があり、種々の治療所をそなえ、一大病院の観がある¹⁾。後者にも劇場がある²⁾。さらによく見ると、リハビリテーション・センター、浴場、宿泊施設などが両者にあり、いっそうの類似性が感じとられる。

それもそのはず、この両者は元来ともにアスクレピエイオン（アスクレピオスの神殿）と称された神殿聖域であって、ギリシア古典期、ヘレニズム時代を通じて盛況を呈した神殿医療（temple medicine）の中心地であったからである。その当時の様子を川喜田愛郎氏は次のように想定されている³⁾。

アスクレピエイオンは多くは郊外の丘にある小川や清い泉をもった聖域であった。神殿がその中心にあるのはもちろんだが宿泊所(病院)、水浴場(しばしば鉱泉浴)、ギムナジウム、野外劇場などの設

備をもった一種のサナトリウムでもあった。徒歩で、あるいは驢馬に乗ってそこにやっとたどりついた多くは慢性の病気に悩む患者たちが、その清浄で静かな環境と、ところ狭しと飾られた奉納品（votives）—かつてそこで回復した病人たちの感謝のこもった捧げ物で、それぞれの病徴をあらわした彫刻、レリーフの類や、その奇蹟的な快癒の記録を刻んだ大理石板など—からうけとる印象には、浅からぬものがあつたに相違ない。さまざまな難症がその日から好転に向う。神癒クライマックスの中心の行事はしかし、言うところのインクパチオ（incubation, koimēsis）にあつた。とある夜、患者は神殿の背景にある至聖所（abatōn）に導かれ、そこで聖なる眠りのうちに神の来臨を待つ。突然、アスクレピオスが女神ヒュギエイア（Hygieia）および蛇—おそらくミノス文明に由来する医術の象徴⁴⁾—を伴って、夢にその温容を現わし、親しく手を触れ、薬を与え、ときには手術さえもして(!) 去る。夜明けとともに患者はその病が癒されているのを見出して驚喜する。

これはさきにも言われた有名な神殿医療の典型的な一例であるが、このような祭儀的医療はヘレニズム期になってその全盛時代を迎えたと言われる。そしてこれと平行して—あるいはむしろこれに先んじて—ヒポクラテス医学の先蹤ともいふべき、ホメロス以来の古典的伝統があつたのである。

ホメロスことにその『イリアス』を読んで気付かされることは、古代オリエントの世界によく見られる呪術的要素 (magical elements) の少ないことである。たしかに病気は神々の怒りによって人間の世界に送られるし、神話の常として、種々の異象に満ちているのは当然だとしても、不気味な呪文や呪術はなく、神々も英雄たちもむしろ明るい合理性や経験性 (rational empirical elements) に立脚—もしくはそれと両立するかたちで—即応するあり方をしていることに注目させられる。

『イリアス』第二巻末尾、いわゆる船軍の目録、の中にトリッケイ、イトマー、オイカリエーなどテッサリア地方の町々の名が挙げられているが、ホメロスはこの地に住まう勇士らを、アスクレピオスの二子にして

すぐれし医師 (くすし) マカオーンとポダレイリオスが率いたり⁹⁾

として、二人の医師を挙げている。このうちマカオーンは、トロイアのパンダロスに射られたギリシアの勇将メネラオスの手当をする記事で有名である。

すぐれし軍医マカオーン、妙技はさながら神のごと、

真中に立ちて負傷者の帯に手を入れたちまちに
鋭きその矢抜き去れば、鋭き鏃砕け落つ…

また猛毒の矢の入りし傷をつぶさに見てとりて
血を吸い出だし、熟練の医師は薬をその上に
塗りたり、昔ケイロンが、その父愛 (め) でて給
(た) びしもの⁹⁾。

この終の行の「その父」とは、いうまでもなくアスクレピオスであり、ケイロンはケンタウロス、すなわち古代テッサリアの蛮族の名で、のちに半人半馬の賢明な怪物と信じられるようになった存在、の一員である。ここから見るとアスクレピオスは明らかに伝説中の人物であるが、早くもヘシオドス⁷⁾ (前8—7世紀) やピンダロス (前518—438)⁸⁾ の時代には神格化され、やがて前述の神殿医療へとつながって行くことにもなった。しかしそれとは別に、ホメロス医療の象徴としてのアスクレピオスを理想として崇める医師たちのギルド⁹⁾とでもいうべきものがあつたと推測される。

ここに用いられた「ギルド」とは周知のように歴史用語としては、共同基金 (cf. Geld) を設け、または共同の目的を遂行するために広く西洋中世に行われた各種の交友団体で、やがて近世の同業組合を指すが、ローマではコレギウム (複, コレギア)、ギリシアではヘタイリア (複, ヘタイリアイ)、シュノドス (複, シュノドイ)、コイノン (複, コイナ)、テクニテース (複, テクニタイ) などと呼ばれたものに当たる。このうちヘタイリアは (同年輩の) 仲間、(目的を一つにした) 協同団体、シュノドスは (相談のための) 会議、(同業者) 組合、コイノンは (利害をひとしくする) 公共体、連合会、テクニテースは技術者集団、といった意味をもつが、実際にはこれらの間の区別は必ずしも明瞭ではなく、大略似た意味で用いられたらしい。こんにちのクラブのようなものから国家レベルの連合体までいろいろあつたわけである¹⁰⁾。自発的なものである点で国家その他の公的機関と異なり、永続性をもっている点で単なる集会和区別される、といえる。

たとえば、古典期ギリシアには、いわば国教ともいふべき、オリュンポスの神々の祭典が各地で行われ、これに参加することは国民的義務とされたが、何の教義もなく自発性も要求されず、その祭りもたんなる行事とされたのに対して、教義を持ち個人の意志によって入会が許され、魂の救済を約束したディオニュソス・オルベウス教団などはその典型的なものといえるだろう¹¹⁾。またこれに付随していた、たとえば音楽や芝居などの技術家集団などもテクニタイ、シュノドス、コイノンなどの名で呼ばれていた¹²⁾。

こうした集団はのちのギリシア・ローマ世界にはいっそう多くなり、デロス、ロードス島などの国際的商業地などを介して、男女、自由人と奴隷、ギリシア人と異邦人との区別なく、志ある者はそのメンバーとなりえて、凡ゆる差別をこえた共同体を実現して行く傾向の一典型となった¹³⁾。

またその種類も、医者、金融業者、建築家、染物屋、洗い張り、洗濯、皮なめし工、靴屋、石工、金工、土工、大工、農夫、庭師、漁師、パン屋、料理人、床屋、ミイラ職人、運送屋など、種々雑多であるが、経済的利益というよりも、共同の信仰や信条をもとにした交友団体という色彩が強かったらしい¹⁴⁾。その際の信仰といっても極めてゆるやかなもので、その仕事の守り

神とされている神格的存在を、儀式的に敬い、祭ることが行われていたが、信条ときまりは厳格なもので、制裁もあったと思われる。

たとえば紀元2世紀の後半のものとして推定されるある碑文には¹⁵⁾、ディオニュソス教団のパッコス祭の総会のあり方が記されている。それによると会員としての承認、登録、会の秩序維持の工夫、これに背いた者の罰則、その会合の中心的位置を占める宗教儀式、会員の情報交換、冠婚葬祭への協力などがメンバーの心得として記されている。これはこの種の共同体が会員相互の利益をはかる自発的共同体であるために必要なことであり、それが他への奉仕を業とするものであるならば、他からの指弾を招かぬためにも、相互の自主規制が必要となることはいうまでもない。

4

ギリシアの古典的社会は前5世紀にはすばらしい発展をとげたが、その前世紀にはすでにクロトンとキュレネに最初の医学校ができたことが知られている¹⁶⁾。このうちクロトンからは当時最も有名であった医者デモケデスが出、アイギナ、アテネを経て、サモス島の僭主ポリュクラテスの宮廷で高評を博し、前522年この僭主の死後は、ペルシア大王ダレイオスのもとで寵愛され、そののちクロトンに帰った。歴史家のヘロドトスは彼のことをその『歴史』3. 125および129—37で生き生きと描き、

クロトン人が医師としての名声を博するに至ったについては、この人に負う所が最も多い。このことがあったのは、あたかも、ギリシア中で医師としてはクロトン人が第一、キュレネ人が第二と称された頃に当るのである¹⁷⁾。

とのべている。そしてその地域でピュタゴラスが活躍していたのはまさにその頃と思われるのである。

すなわちピュタゴラスは前570頃、サモス島に生まれ、エジプトなどで学んだのち、帰国したが、ポリュクラテスの僭主制を嫌って国を去り、当時ギリシア人の植民市であったクロトンに移住して、のちにピュタゴラス教団といわれた、自由かつ自発的な学問・宗教・政治共同体をつくった。これが当地で大きな影響力をもち、前510年頃、隣国シュパリスから攻撃を受けた際にも、町を守る大きな役割を果たしたことはよく知ら

れている。ちなみにこの時、町を守るために軍隊を指揮したのは有名な競技家ミロンであって、前述デモケデスは彼の娘と結婚している¹⁸⁾。

ピュタゴラスの思想や学説についてここでのべる余裕はないが、ピュタゴラスを中心とした共同体はソクラテスの時代にはすでに有名であって¹⁹⁾、そのうちの修行者(Pythagoreioi)は、賛同者(Pythagoristai)と異なり、財産を共有し、生涯共同生活を続け、潔き生活をし、殺生を避け、多くの禁忌を守ったことなど、何か、仏教のある派の教団の特徴と似た所があることに気づかされる。

しかしその宗教の浄めには医療と音楽と数学が大きな役割を占めていた。このうち医療の分野では、

養生に関する分野を一番受け入れ、この分野について最も詳しく学ぼうと努めた。次に、あてがわれる食物の調理そのものについて研究し、詳細に規定しようと努めた、ほとんど最初の人びとであった。(中略)薬品はあまり是認しなかったが、その中で外傷に効くものを一番多く使用した。しかし手術や焼灼の手段は受け入れることが何にもまして一番少なかった、云々²⁰⁾。

とある。この報告のうちに含まれるいくつかの特徴的事実については、やがて検討されることになる「誓い」の主要部分での考察に委ね、ここでは上述の共同体のあり方に注目しておくことにしたい。

5

以上の予備知識の上で、「誓い」の文章の第一部ともいうべき冒頭の部分を読んでみよう²¹⁾。

私は誓約します。医神としてのアポロンとアスクレピオスとヒュゲイアとパナケイアおよびすべての男と女の神々にかへ [これらの神々を証人として] 私の判断と力の限りをつくして、以下の誓いと以下の誓約箇条書きを完全に実行するであろうことを。—まず(1)私にこの技術を教えた方を私の肉親同様と心得ます。また(2)暮らしを共にします。そして(3)必要に応じて金品を分け与えます。また(4)この方に由来する一族を自分の男きょうだいたち同様重んじます。そして(5)この技術を学ぶことを彼らが求める場合にはいつでも、代価や誓

約簡条書なしで〔医師としての〕心得や講義やその他あらゆる知識を伝授します。これらを教えるのは(6)私の息子たちと私を教えた方の子息がたにですが、また〔医者〕のきまりによって、誓約簡条に署名させられ、かつ誓わしめられた弟子たちにも(同様にいたします)。しかしこれ以外の他の何びとにも〔伝授いたしません〕。

[]は補訳。

「誓い」のこの部分の文体および誓いの形式やその意味については前述したので²²⁾、ここではその内容をよく読んで、この共同体のあり方について考えてみたい。

まずこの部分に登場する人物であるが、「この技術(医術)を教えた方(師匠)」「(それを教わった)私(徒弟)」「(師匠の)子弟」「(自分の)子弟」「(その他の)徒弟」が主役である。「私の両親」「師匠の一族」「私の兄弟」「これ以外の人びと」は脇役的位置を占めている。

これらの人物相互の関係はやや複雑である。徒弟と師匠とは、それが血縁上の親子関係にない場合でも、血縁の親子間における保護と奉仕の関係に倣って、生活を共同にし、徒弟は師匠の必要に応じて金品を分け与えるばかりか、その配慮は師匠の一族にも及ぼされる。

昔の技術は父子相伝の趣が強かったが、この場合にも例外ではなく、そこには当然自分の子弟と師匠の子弟が含まれる。しかもその際、自分の子弟と師匠の子弟とは、異なった意味においてではあるが、いずれも代価や誓約簡条書の提出を免除される。これに対してその他の徒弟志願者にはこの両者の提出が義務づけられ、慎重な吟味を経て、この術が伝授されることになる。

伝授される事柄には心得(palangelies)、講義(akroesios)、知識(mathesios)の三つが挙げられているが、これらをそれぞれ、医師としての教養にかかわる一般の心得、専門についての口頭の授業、施術中の実習指導ととることができるかはさておき²³⁾、こんにちの医学教育の各部門の萌芽らしきものが含まれているとはいえるであろう。そしてこれらの全体は門外不出の秘教的(esoteric)性格を持っていたのである。

以上見たように、この医術伝承の共同体は、血縁共同体的団体観に色濃く染められている。しかしこの団体もはや世襲的なものにとどまらなくなっていることは、この「誓い」の存在そのものがこれを示している。すなわちこの「誓い」を誓わされる者は、医師の子弟ならざる徒弟(apprentice)であって、こうした者たちが次第に多くなり、医師の世襲制そのものが崩れかけてきている社会を想定させるということである。

ヒポクラテス集典の世界は、一以下の続稿でやがて見られるであろうように一本稿冒頭にふれた神殿医療の世界とは明確な一線を画したものであった。それは時代の相違ではなく、医に対する姿勢の相違であった。すなわち、古代オリエントの宗教にもつながる、権威と伝承とを重んずる厳粛な神官的祭儀的精神と、ホメロスの世界観にもつながる、明るい実証的知性的科学精神との相違であった。

この科学的精神が医術の効力を確実にし、その可能性を飛躍的に拡大したことに疑いはない。しかし科学が本来的に持つその普遍性への志向と、狭い地縁血縁の共同体に守られてきた風俗習慣を相対化する解放的效果は、また同時に、好奇心その他の欲望を無限に許容する傾向を助長し、結果として、病み悩む患者への同情という医の原点から逸脱し、ひいては医者自身への不信不評をももたらす惧れもまた生じてくる。

この時代に同業者集団としてのギルド的なものがどの程度にまで普及していたかを確定することはむづかしい。しかしこの時代において一種の宗教的倫理的共同体でもあった古代の都市国家(ポリス)が解体し、国民意識が世界市民(cosmopolitês)へのそれと拡大されるにつれて、医師の集団もまたあらゆる人々に開放されることになり、従来の世襲的教育の中で、人間として当然もつべきものと期待されたエトス(良習)―つまりエートス(倫理)の前段階たる「しつけ」―の教育が弛んできたらしい。このことはヒポクラテス集典中の義務論(deontology)、つまり患者に対して医者を守るべき態度を論じた小論集を見てもうかがわれることである。

たとえば『品位について』(peri euschemosynēs)という文章には、患者の部屋への入り方や入ってからのふるまい方についての、きめ細かい注意が数多く含まれ、着物の脱ぎ方²⁴⁾から威厳ある態度、簡潔な話し方、沈着冷静さにふれ²⁵⁾、検診²⁶⁾や患者の心理²⁷⁾などにも及んでいる。また『箴言』(parangeliai)にも、謝礼のことをあまり早く切り出すなと²⁸⁾、助言をうけるのは恥ずかしいことではないが、助言者も公然と争ってはならず、ほかの医師の見立てをあげつらってはならぬ²⁹⁾といったエチケットが加わっている。意地の悪い見方かも知れないが、当時このような無礼が間々行われていたのではないかと推測されるのである。そしてこのような事態の中で、しつけの原型にある父子相伝的あり方を生かし、感情的包容性のある人間関係のなかで、この術知の伝承を確実なものにしようという意図が働いていたのではないかと思われる。

7

すでにさきにも見たように、宗教と科学の接点に共同体を据え、医学と音楽を肉体と精神への浄めとして重視したピュタゴラス教団はクロトン医学と極めて密接な関係にあった。ヒポクラテスの「誓い」もこの線上のものとする学者が³⁰⁾、かなりの説得性を持つ。しかしピュタゴラス派の人間関係は、共同生活、タブーの厳守という点で、「誓い」の人間関係と似ているが、始祖の言葉が絶対的権威を持つ反面 (autos epha 「子曰く」)、師弟関係の中に父子相伝的關係を入れたりすることの証拠は不十分である。この相違はむしろたとえば、ピュタゴラスの弟子で、解剖学の祖でありながら³¹⁾暖乾冷湿の諸力 (dynamis) の同権 (isonomia) を健康の原理であるとすると、いささか形而上学的な病理論を提唱した、クロトンのアルクマイオン³²⁾と、呪術的宗教的要素を洗い落とした経験的合理的な医術と医学を志向したヒポクラテス一派との相違であろう。彼らはピュタゴラス教団がその中心思想とした自然学や宇宙論とはことなり、助力を待ちこがれている個々の病人をつねに目の前に据えて、その具体的助力者たらんとした臨床中心の医療者として、科学を重視しても、形而上学的ではありえなかったのではないか。

こうしてこの「誓い」の筆者は、古代市民国家の倫理的宗教的基盤を確保しえず、さればとて強力な個人宗教の信仰とエートスをも強要しえない医師集団のメンバーとして、当時行われたギルド的組織の中に父子相伝的な人間関係を生かし、その中で医師として人間づくりを企てたのだと考えられる。

とはいえ単なる父子相伝的な人間関係だけで、ヘレニズム・ローマ世界に住む人間の人間づくりができるとは、当時の人びとの人間感情からは考えられないことであつたらう。この「誓い」の記者が、その冒頭に、アポロン、アスクレピオス、その子たちという、三代の父子相伝というかたちで、誓いの証人を並べたのは、当時盛んになりつつあった種々の結社の入会誓約書のひそみに倣う以上の意味がこめられていたからであろう。すなわちこの「誓い」に唱われていることは単なる家父長の要請であるばかりではなく、医祖たちの意志でもあり、メンバーは畏敬と慎みの心をもってこれを受け入れ、誓わなくてはならないということである。

しかしその神は、ストア派のクレアンテス (前331—232) が宇宙を生物体と見なし、神をこの宇宙の靈魂、太陽をその心として、このような意味をこめてその導きを祈った、宇宙神ゼウス³³⁾ではなかった。いわんやおのが独り子を与える程に世を愛したキリスト教の神³⁴⁾ではなかった。それは古典期ギリシアのポリスの信仰が生み出したオリュンポスの神にまでさかのぼらせた同業者の神々であった。いわば同業者の神格化であった。ここから出るしつけや倫理綱領は結局自分たちの利益に還元されるものであった。そのことはこの「誓い」のむすびの次の文章に明らかである。

さて私がこの誓いを完全に実行して破ることがない場合には、どうか私がいつまでもあらゆる人びとの間で称賛され、私の生き方と技術との稔りの喜びをお与え下さい、しかしこれらを犯した誓いにそむく場合は、これらとは逆のことがらを[お与え下さい]。³⁵⁾

ここに個人的にも一従って団体としても一それが目ざした功利主義的目標はおおうべくもない。それゆえにこの「誓い」は、その家父長的色彩とともに、このような同業者集団的倫理綱領の性格を温存しつつ、ローマ帝国に入り、やがてキリスト教世界に入って大

きな変改を受けることになるのである。

8

ローマ時代の同業者集団ともいうべきコレギアが西ローマ帝国滅亡後どうなったかは謎にまつまれている。これと中世ギルドとの間につながりがあったかについても論争が続けられているという³⁶⁾。しかし中世の同業者集団としてのギルドは、会員の相互扶助や協力という目的の背後に、神を敬い、兄弟愛に生き、社会全体の福祉をも目指すという至高目標を持っていた³⁷⁾。

このことは中世の徒弟制度 (apprentice system) においても見られる。よく知られているように、中世のギルドの中には、親方—職人—徒弟という段階があり、徒弟になる年齢は10—16才で、期間は凡そ2—8年程度であった。親方の家で寝食をともにし、技術を修め、さらに3年間ほど職人として働いたのち、「親方作品」(Meisterwerk, masterpiece) を提出して試験に合格すれば独立の親方になることができた³⁸⁾。このような中で、特別有力な組合の集団が、都市行政を支配することに成功した時でさえ、ギルドは通常、自分たちの経済上の利益よりも、都市全体の利益を優先することのほうが大切であることを認識していた、という³⁹⁾。自分たちのグループの利益繁栄やそのための温情主義より高いものに注がれていた彼らの視線に注目させられる。

このような師弟関係 (leader follower system) の日本の表現として「親方子方関係」があり、仲間生活の有力者がオヤカタとして指導的立場に立ち、追随するコカタの生活万端の庇護に任ずるかわりに、その奉仕を求め、コカタはその責を果たすことで生活の保障を得るという仕組みは、よく知られている。柳田国男によれば、

オヤコは本来タテ(上下)の人間関係をさす語で、特定の生活仲間ないしは労働組織における統率者(オヤ)とそれに従うもの(コ)との関係を広く意味した。漢字の「親」をあてて、「生みの親子」に限定するにいたったのはのちの分化で、そのため一般のオヤコも親方・親分=子方・子分と呼び分けるようになった。

という⁴⁰⁾。この説の当否はしばらくおくとしても、親方

子方の結び付きは全人格的であり、保護と奉仕の内容が契約という理性的意志的選択決断によるものでなく、いわば相互の共同的信頼感に立ち、理性的であるよりは情感的包容性をもっている点で、血縁の親子間における保護と奉仕の関係と似ていることはいなめないであろう。

このような親方子方関係は生活のいろいろな所でいろいろな形で表われているが、上のような性格を一様に持っている。いわゆる「タテ社会の人間関係」⁴¹⁾にヨコの人間関係がつながる有様を社会学者竹内利美氏は次のようにのべている。

上下というタテの人間関係が卓越し、それに同輩としてのヨコの人間関係が随伴する…。兄弟分という同輩関係は同一の親方に所属する子方同士の間に限定され、広いつながりを生じなかった。タテの人間関係の卓越傾向は日本社会の久しい伝統であろうが、職能身分制と家制度を支えとした近世の社会体制が、特にこの傾向を支えていたといえよう。云々⁴²⁾。

こんちここに記された職能身分制と家制度は、制度としては、ほぼ完全に解消したといつてよからう。しかし親方子方関係は依然として職場の人間関係を動かす実質的な力の源泉ともなり、個人の生活を裏から保証する支えともなっている例も多い。ふたたび竹内氏の言葉を借りれば、

実力者中心のこうした私的結合、いわゆる派閥は政界、官界、財界、学界、芸能界などあらゆる領域に形成され、いずれも古い親方子方関係を色濃く受継いでいる。厳格な制度下に組織された近代の巨大な官僚制度社会機構の内部には、こうしたインフォーマルな伝統的人間関係は広く再生して、それをあやつる実質的な力をなお備えているといえないこともない⁴³⁾。

ということになる。

このことは実力者が容易にカミとなり、神格化されることの多いわが国の人間観や宗教観に起因するところが多いと考えられるが、また物事を理性的意志的にとらえる傾向の弱さにもよっているともしよう。この点日本の共同体は「誓い」の共同体に重なる面を持っているのであって、日本の伝統的生活感情に生きる者にとって理解するには容易であるが、西洋においては古代ローマ以後、主としてキリスト教倫理と科学的精

神によって次第に克服されてきた事柄であることに注目させられる。そしてこの消息に注目することはわれわれの共同体の行方と課題に心を向ける重要な一助となるであろう。 (この項終)

注

- 1) Angelici Charitonidou: Epidaurus, the sanctuary of Ascrepius and the Museum, Clio editions, Athens, 1978, 17.
- 2) Dimitris Davaris: Kos, Hippocrates' Island, tr. by Pandelis Symponides, Dimitrios Davaris, Athens, n. d. 22. 40-41.
- 3) 川喜田愛郎:近代医学の史的基盤, 上, 岩波書店, 東京, 1977, 46.
- 4) このことは, 前1600年ごろのものと思われる, クノッソス宮殿の中央聖所の中の礼拝堂や宝物殿にあった「蛇女神」(snake goddess)の神像にうかがわれる。(ヘラクリオン考古博物館, 1階, 第4室, 第50陳列ケース収蔵) Logiadou-Platonos, et Nanno Marinatos: Crete, D. I. Matioulakis, Athens, 1985, 113, 116.
- 5) 2.731-2.
- 6) 4.213-9 (中略).
- 7) Hesiodos, Fr. 50 (Pausanias, 2, 26. 3-7) ed. Merkelbach, R. et West, M. L. (O. C. T.) 1970, 136.
- 8) id. (schol. Pind. *Pyth.* 3. 14)
- 9) 川喜田: 前掲書, 47.
- 10) くわしくは Poland, F.: Geschichte der griechischen Vereinwesens, 1909 や Rostovtzeff. M.: Social and Economic History of the Hellenistic World, 1941. 1063-6, 1590-2. 参照.
- 11) 古くは Rohde, E.: Psyche, Seelenkult und Unsterblichkeitsglaube der Griechen, 2Bde, 1910 や Harrison, J. E.: Prolegomena to the Study of Greek Religion, Cambridge, 1922. 新しくは Nilssohn, M. P.: Geschichte der griechischen Religion, Beck München, 1961, 1. 532, Guthrie W. K. C.: Orpheus and Greek Religion, Methuen, London, 1952 など枚挙にいとまがない.
- 12) "Clubs" 3 (by Tod, M. N.) in the Oxford Classical Dictionary, 1950.
- 13) その多様性, 組織, 実情などについての碑文その他に依拠した記述は前注10) にあげた Poland の書にくわしい.
- 14) その古典的な一例, エベソスの銀細工人, 新約聖書「使徒行伝」19. 24以下.
- 15) SIG, 1109, apud Tod, M. N.: Sidelight on Greek History, 1932, 69 ff. esp. 86ff.
- 16) Fuchs, R. in Pushmann, T. (eds. M. Neuburger u. J. Pagel): Handbuch der Geschichte der Medizin, 3Bde, Jena, 1902-05 (Peprint: G. Olms, Hildesheim u. New York, 1977, I. 191-193.
- 17) Herodotos, 3. 131. (松平訳). なおデモケデスの根本資料は Diels, H.: Die Fragmente der Vorsokratiker, 1, 110-112. 参考文献その他は P. W. 5. 132 にある.
- 18) この辺の事情は前注 Diels, 14A14 (Diod. 12, 9, 2, sqq.): 14A16 (Jambl. V. Pyth. 248 sqq.): (山本光雄訳「初期ギリシア哲学者断片集」岩波書店, 東京, 1958. 17-18に生彩ある叙述がある.
- 19) Pl. Rp. 10. 600A.
- 20) 前掲 Diels, Fragmente, 58D1 (Jambl. V. Pyth. 163 sqq.)
- 21) 『山梨医大紀要』第5巻(1988)43掲載の小論, 逐語試訳による.
- 22) 同上 第5巻および第6巻所収の拙論参照
- 23) Jones, W. H. S.: The Doctor's Oath, Cambridge, 1924, 9.
- 24) Hippocrates, Hab. 12 (ed. Littré, 9. 236).
- 25) id. 12 (9. 238 sqq.)
- 26) id. 13 (9. 240)
- 27) id. 14 (9. 240)
- 28) Hippocrates, Praecep. 4-5 (ed. Littré, 9, 254 sqq.)
- 29) id. 8 (9, 262 sqq.)
- 30) Edelstein, L.: 'The Hippocratic Oath' in Ancient Medicine, Johns Hopkins Press, Baltimore, 1967, 所収.
- 31) Diels: Fragmente, 24A10 (Chaleid. in Tim. 279).
- 32) id. 24B4 (Aet. 5. 30. 1).
- 33) Kleantes, Fr. 527 (ed. Arnim, 1. 118).
- 34) 「ヨハネ福音書」3. 16.
- 35) 『山梨医大紀要』第5巻(1988)44に掲載の小論,

- 逐語訳による。
- 36) Dobson, R. B.: 'Guild' 伊藤栄訳. 『ブリタニカ国際大百科事典』1973, 5,709.
- 37) Peplasis, A. H. et Johnston: 'Guild' in Encyclopedia Britannica, 1964, 10, 1013.
- 38) 以上『ブリタニカ国際大百科事典』1974, 小項目版, 4, 788による。
- 39) Dobson 前注36), 5, 711.
- 40) 柳田国男: “オヤと労働”(家閑談), 『柳田国男集』
- 筑摩書房, 東京, 1969, 15, 242.
- 41) 中根千枝氏の同名の書はいまや古典(講談社新書).
- 42) 竹内利美: 「親方子方」『ブリタニカ国際百科事典』1973, 3, 473. なお『社会科学大事典』2, 「親方・子方」の項, 「親分子分の関係」の項(大橋・喜多野・竹内執筆)1968, 鹿島研究所出版会, 参照。
- 43) 同上同箇所。

Abstract

Looking into the Hippocratic Oath (3)

Shigeru KAWADA

The Hippocratic Oath was written to encompass the various forms of medical groups in the Graeco-Roman world. In this essay, I examined some characteristic elements in the medical community by elucidating some of the remarkable points they held in common. Because the Oath particularly considers the “patriarchal element among fellow professionals” it is relevant to the Japanese society.

Department of Philosophy and Ethics